

「書くこと」の断罪—カフカ『流刑地にて』¹の自己言及性

古川昌文

0. はじめに

カフカは「書くこと」と「生きること」が不思議な形で結びついている作家である。「書く」という行為が何ごとかを表現するための手段であることを越え、時に「生きること」の代替となり、時に「生きること」と一体化しようとする。そのためかどうか、カフカの作品には、明示的であれ暗示的であれ、「書く」とこととの自己言及的な関連を見て取ることができる。書かれた作品の中に作家の「生」が何らかの形で否応なく表出されるとすれば、カフカの場合にはその「生」の位置にしばしば「書くこと」が様々な意匠で現れるのである。

たとえば『判決』(*Das Urteil*, 1912年)におけるゲオルクと父親との対立では手紙が大きな役割を果たしている。ゲオルクが友人に書いた手紙と父親が友人から受け取った手紙とが内容上真っ向対立するのだ。これは「書くこと」もしくは「書かれたもの」の真実性をめぐる対立である。本論で扱う『流刑地にて』(*In der Strafkolonie*, 1914年)では、処刑機械によって受刑者の罪がその身体の上に正しく「文字」(Schrift)として刻みつけられる。この奇怪な処刑方法の内にもまた、「書くこと」との関連をはっきり見て取ることができる。

ではその関連とはどのようなものか。『流刑地にて』の中にカフカにおける「書くこと」の問題性を読み取ろうとする議論は非常に多い²。本稿では『流刑地にて』に詳細に描かれる処刑と処刑機械が、その2年前の『判決』によって得られた執筆方法のアレゴリーとなっていることを示し、両者の関係のあり方に焦点を絞って、カフカが『流刑地にて』で表現した「書くこと」の意味について考察する。

¹ 『流刑地にて』、『判決』、『変身』のテキストは次のものを用いた。この3作品からの引用は頁数を本文中に記す。Franz Kafka, *Ein Landarzt und andere Drucke zu Lebzeiten*. Hrsg. von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch, Gerhard Neumann, Fischer-Taschenbuch Verlag, 1994.

² 受刑者の身体に直接判決を刻みつけるという処刑方法ゆえに、特に「書くこと」と「身体性」をめぐる議論が多く行われている。Vgl. Alexander Honold, *In der Strafkolonie*. In: Bettina von Jagow und Oliver Jahraus (Hrsg.), *Kafka Handbuch, Leben-Werk-Wirkung*. Vandenhoeck & Ruprecht, 2008, S.477-503

1. 『判決』の書き方

まず『判決』の執筆によってカフカが見出した創作の手法についての私見を述べておこう。

1912年秋に一晩で一気書き上げられた『判決』は自作には極めて厳しいカフカには珍しく最大級の満足を表明している作品である。出版が決まり、校正をしている頃の日記にカフカが書いた「この物語は本物の胎児のように汚物と粘液で蔽われて僕の中から生まれてきた」³という言葉はよく知られている。これより2年ほど前、カフカは思うように書けないことを嘆き、その原因を「僕の心に浮かんでくるすべてのものが、僕の根っこから浮かんでくるのではなく、どこかせいぜいその中ほどあたりから浮かんでくるのだ」⁴（傍点筆者）と記していた。自己の内面に分け入り、自分自身も気づいていない、しかし紛れもなく自分自身であるような領域から、つまり「根っこから」(von der Wurzel aus)浮かび上がってくるものを言葉にすることをカフカは目指した。「本物の胎児のように(…)僕の中から生まれてきた」という自らの作品に対する評価にはこれまで目指してきたものに到達したという強い手応えと喜びが感じられる。

この「胎児=誕生」(Geburt)をカフカは「汚物と粘液で蔽われて」(mit Schmutz und Schleim)と決して美しいとは言えない生々しい言葉で表現した。このことは『判決』執筆時の様子とも関係しているようだ。というのも、この短篇を一睡もしないで書き終えた朝の様子をカフカは昂奮を抑えきれないかのように切れ切れの文体で次のように記しているからである。

夜の真中で消えていく疲労。震えながら妹たちの部屋に入る。朗読。その前に女中の前で背伸びして言う、「今まで書いてたんだ。」人の寝た形跡のないベッドの眺め。まるで今運び込まれたかのよう。証明された確信。それは小説を書くとき僕は書くことの卑しい下層にいるということ。そのようにしてしか書けないのだ。そのような状態の中でしか、そのような肉と魂の完全な開放なしには。⁵

注目したいのは「書くことの卑しい下層」(in schändlichen Niederungen des Schreibens)というグロテスクとも言える表現である。„Niederung”は「低地」という意味の他に特に複数形で社会的階層としての「下層」の意味に使われる語で、これに「恥ずべき、下劣な」という意味の„schändlich“という形容詞が付くとき、イメージ

³ Franz Kafka, *Tagebücher 1912-1914*. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcom Pasley, Fischer Taschenbuch Verlag, 1994. S.125

⁴ Franz Kafka, *Tagebücher 1909-1912*. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcom Pasley, Fischer Taschenbuch Verlag, 1994. Ebd. S.14f.

⁵ Franz Kafka, *Tagebücher 1912-1914*. a.a.O. S.101

されるのはたとえば賤民層であり、ゲッターである。明らかにカフカはここで自らの出自であるユダヤ貧民層に自らの執筆姿勢を重ね合わせている。このイメージは先の「汚物と粘液で蔽われて」という表現とも通底していよう。カフカの「根っこ」にはこうした汚れのイメージが付き纏っている。それが「肉と魂の完全な開放」(die vollständige Öffnung des Leibes und der Seele)と結びつき、「書くこと」の成功に繋がる。そうした「下層」へと降りて行き肉と魂を開放することが『判決』の執筆によってカフカが体得した方法であった。

「卑しい下層」へと降りていくという方法は物語の内容と連動して実行されていく。『判決』は主人公ゲオルクが手紙を書き終え、物思いに耽っている場面から始まる。場所は川とその対岸を見晴らす彼の明るい部屋だ。やがてゲオルクは書いた手紙を持って陽の当たらない暗い父親の部屋へと移動する。「下層」への下降である。老いた父親は暗い部屋にいただけでなく、古い汚れた下着を着替えることなく着続けている。ゲオルクはこの「下層」への下降によって物思いという意識の領域から、自分と繋がった父親の棲む意識されざる領域へと移動したのである。それは自己の一部でありながら他者化して排除していたもう一つの自己への接近に他ならない。このような「下層」へ降りていくという執筆の方法は、書いているカフカの精神的な姿勢に止まるのではなく、物語の展開と相伴って遂行されるのでなければならなかった。

『判決』の成功から鋭い喜びを得たカフカは勢いをかって『火夫』(Der Heizer)と『変身』(Die Verwandlung)を続けざまに書く⁶。この二つの作品でも、「下層」への下降が『判決』とは別の形をとって行われている。『火夫』では主人公カール・ロスマンが船室に置き忘れた傘を取りに行く途中で道に迷い、行き着いた先は船の底部にあるボイラー室だった。そこは『判決』の父の部屋と同様、どんよりと暗い。ボイラー室で出会った火夫との対話から物語は動き始める。『変身』では空間的な移動(下降)は起こらない代わりに、グレーゴル・ザムザの人間から虫への変身という存在形態の下降が起こる。ありふれた家庭の日常の中に、存在しなかったはずのもの——つまりは「根っこ」——が異物として突然姿を現わすのである。こうした種々の下降はさながら『判決』で掴んだ方法とそれによって探り当てられた「根っこ」を別の形象・設定に置き換えて実験しているかのようである。

2. 『流刑地にて』と『判決』との緊密な結束

⁶ 『火夫』は1913年に短篇作品として出版されたが、未刊の長篇『失踪者』(Der Verschollene)の第一章として構想された。『失踪者』が書き始められたのは『判決』執筆の前年(1911年)であるから『火夫』の原型となるものは『判決』以前に書かれていたと思われる。しかしカフカはこの長篇の出来に不満で執筆を中断している(原稿は残されていない)。そして『判決』の成功後に改めて書き始めるのである。この意味で今ある形の『火夫』は『判決』後に執筆されたと見なすのが妥当であろう。

『流刑地にて』は『判決』からほぼ2年後の1914年に書かれた。ちょうど長篇『訴訟』(*Der Proceß*)を書き進めている最中である。裁判や処刑というモチーフは——それらが現実世界のそれとはおよそ隔たったものである点も含めて——『訴訟』と共通している。以下では、この短篇作品が前節で「書くこと」の側面から見た『判決』と緊密に結びついていることを示す。

この作品の舞台となる流刑地はヨーロッパの外、南方にある島である。後に述べる処刑の方法の異常さだけでなく、処刑に至る手続きの野蛮さも非ヨーロッパ的ないしは前近代的である。こうした物語の基本設定において『流刑地にて』もまた表の世界(ヨーロッパもしくは近代)から裏の世界(非ヨーロッパもしくは前近代)へという下降の性格を持つ。ヨーロッパからやって来た学術旅行者がこの流刑の地で見聞する処刑が物語の中核をなす。流刑地への下降により描き出されるのは「書く」という行為が行われる場、先のカフカの言葉を使えば「卑しい下層」である。受刑者の身体の上に直に「馬鋏」(Egge)で罪状が刻みつけられるという処刑の方法はまさしく「書くこと」のアレゴリーである。

処刑機械の仕組みを現地の士官(Offizier)が学術旅行者に説明する。機械は「ベッド」(Bett)、「製図工」(Zeichner)、「馬鋏」(Egge)という俗称を持つ3つの部分から成り立つ。機械上部にある製図工と呼ばれる箱の中には大小無数の歯車があり、判決文に応じて調整され、馬鋏の動きを決定する。馬鋏には複数の針があり、これが受刑者の肌を切り刻む。製図工を頭脳とすれば馬鋏は手にあたる。受刑者は下部にあるベッドにうつ伏せに固定され、製図工からぶら下がった馬鋏の針が、あたかもペンであるかのようにその身体に判決を刻んでいく。但し、刻まれる文字は刑罰の内容を直接示すのではなく、「…であれ」という命令の形を取る。

受刑者にはあらかじめ罪状は知らされない。自分の罪が何であり、どういう判決が下されたのか、まったく分からないままベッドに括りつけられる。処刑は12時間かけて執行される。6時間ほど経った頃、「どんな愚か者にも理性が兆し」(S.173)、受刑者はわが身に刻まれる傷を解読(entziffern)し始める。最後には受刑者の顔に「浄化の表情」(der Ausdruck der Verklärung, S.178)が現れる。こうして受刑者は自分の罪を文字通り身をもって知るのである。

このような残酷かつ異様な処刑が『判決』とどのように結びついているのか。マーク・アンダーソンは両作品の類似性を次のように明快に指摘する。

カフカが『判決』を書いていくさまと、『流刑地にて』で「判決文」と「装飾文様」が書き込まれていくさまとは、何とよく似ていることだろう。書くという営みに要する時間的持続(『流刑地にて』での処刑は十二時間かかり、『判決』執筆は一晚かかり)、テキストを受動的に受け入れるという姿勢、身体が時間的秩序の領域

を脱して精神的秩序の領域へ入り込んでいくにつれ薄らぐ苦痛、「肉と魂」を「完全に開放する」こと、そして何より「浄化」の訪れを示す目の輝き、このふたつの作品のあいだでは、本質的な要素はほとんど同じであると言ってよい。⁷

『判決』についてのカフカの日記の記述を踏まえたこの指摘は正鵠を得ている。12時間をかけて行われる処刑は『判決』を書いた時間に相当する。さらに細かく見れば、刑の執行開始後6時間で受刑者に「理性が兆し」、「傷を解読し始める」のは、『判決』の中ほど、ゲオルクが父の部屋に行き、父の言葉に抗弁できなくなっていく段階に相当する。最後にゲオルクが父の死刑判決に唯々諾々と従い川に身を投げるのは自らの罪を認識したからであろう。『判決』を書き進めていった12時間はカフカが自己を処刑していくプロセスであった。「書く」ことによって自らに下した判決と処刑が『流刑地にて』の処刑場面で再現されているのである。

また、受刑者が予め自分の罪状も判決も知ることができず、身体に針で刻まれる文字によって初めて知ることができるという点には、『判決』執筆後にカフカが日記に記した文章との深い繋がりを見出すことができる。カフカは自分が書いた『判決』の意味するところが分からず、執筆後に日記の中で様々な解釈を試みているのである。

だが、故意か見落としか、アンダーソンが指摘していないことがある。一つは、『判決』もまた、それ以前の「書くこと」を自己言及的に指示していることである。冒頭に述べたように、『判決』では手紙が重要な役割を演じている。ゲオルクが友人に宛てて書いた手紙とは、ゲオルクの自己理解に他ならない。父親がゲオルクの言葉を嘘だと断じるのは父親が同じ友人からゲオルクの説明とは異なる内容の手紙を受け取っているからである。ゲオルクの手紙はカフカがそれまで書いてきたものに相当し、それに対して「嘘」という判定が下される。ゲオルクへの死刑宣告はカフカが自分自身の「書くこと」に対して下した判決であり、「根っこから」ではなく「せいぜいその中ほどあたりから浮かんでくる」ことを書いたに過ぎない自己に対する断罪である。『判決』はカフカがこのような自己言及的な書き方を見出した最初の作品であり、それゆえ『流刑地にて』を含むその後の作品群の原基となっている。この意味でも『流刑地にて』は『判決』で成功した自己言及を形を変えて再現して見せているのである。

もう一つは——こちらの方が重要だが——食をめぐる問題である。これについては節を改めて述べる。

⁷ Mark M. Anderson, *Kafka's Clothes. Ornament and Aestheticism in the Habsburg Fin de Siecle*. Oxford University Press, USA, 1995. S. 196 訳文は邦訳『カフカの衣装』（三谷研壘／武林多寿子訳、高科書店、1997年）を一部訳語を変えて利用した。

3. 食の問題

士官が学術旅行者に語る処刑についての説明中に次のような箇所がある。処刑台に固定した受刑者の口には叫んだり舌を噛み切ったりしないようフェルトを詰め込んでおくのだが、処刑が始まって2時間ほどたつともはや大声を出す力も無くなる。その頃、口からフェルトを取り出す。傍らの容器には粥(Reisbrei)を入れておく。受刑者は例外なく旺盛な食欲を示して粥を舌で掬って食べ始める。しかし6時間経つ頃にはもう食べようとはしなくなる。前節で引用した「どんな愚か者にも理性が兆」するのはこの後だ。そして受刑者が食欲を失い、徐々に理性が兆してくるこの時間帯こそ、士官が最も熱心に受刑者を観察する時である。

こうしてみると、この処刑は身体に判決を刻みつけるという特異性だけに目が行きがちだが、食に対する欲望からその消失へ、さらに食欲の消失による肉体から理性(罪の認識)への移行を象徴的に現出させるところに意味があるのではないだろうか。

学術旅行者の前で処刑されようとしている受刑者の罪状はこのことと密接に関係しているように思われる。彼の罪なるものは実に他愛のないものである。彼はある大尉の従卒であり、大尉の部屋の外で眠り、毎時間鳴る鐘の音と共に起きて敬礼する義務を負っていた。この義務を怠ってうたた寝しているところを大尉に見つかり、鞭を受けた際に逆らってしまったこと、これが処刑に至る罪のすべてである。「不服従と上官侮辱の罪」(S.161)と説明されているが、ここに死刑に値するものを見出すのは難しい。おそらく死刑の理由は上官に逆らったこと自体にあるのではなく、逆らい方にある。この従卒は鞭を打つ大尉の足にしがみつき、揺すぶりながら「鞭を捨てろ、でないと噛みつくぞ」(S.168)と叫んだ。「噛みつくぞ」と訳した箇所は *fressen* が使われている。文字通りには「食っちゃうぞ」である。「食」はカフカ文学の中にしばしば現われるモチーフである⁸。それが従卒のこの言葉にもさりげなく姿を現し、密かに重要な役割を担っているのではないだろうか。死刑判決を受けた従卒は頭の弱い愚かな男として描かれているから、「噛みつくぞ(食っちゃうぞ)」を単に幼児性の現れと取ることもできなくはない。そうした二重性をカフカのテキストは常に持っている。しかし従卒の行為に対するあまりに重い判決や士官の説明する処刑時の粥の使用はいかにも滑稽で理不尽に過ぎる。これらをうまく関連づけようとするならば、「食」を軸に据えて考えるのが妥当であろう。「食っちゃうぞ」という食に関わる従卒の発語こそが死刑判決を引き寄せたのである。

では「食」への欲望がなぜそれほど重い罪となるのか。佐々木博康はその『変身』論の中で「食」の問題を取り上げ、これを「生の権力性」と関連させて凡そ次のよう

⁸ 『断食芸人』や『ある犬の探求』のように「食」が前面に出た作品もあるが、『判決』や『変身』では隠し味のように「食」のモチーフが顔を覗かせる。『変身』については後述する。

に論じている⁹。虫に変身したグレーゴル・ザムザが次第に食欲を失っていくのに対して、三人の下宿人は旺盛な食欲を示して大皿に盛られた肉を食べる。このことはグレーゴルという働き手を失ったザムザ家であって下宿人たちが実権を握っていることと結びついている。グレーゴルの死後、父親のザムザ氏が下宿人たちに立ち退きを迫る。それに従い階段を降りて去って行く下宿人たちと反対に、肉屋の小僧が — おそらくザムザ家に肉を届けるべく — 階段を上がってくる。ここには権力の逆転が肉の上下によって象徴的に示されている。

佐々木が指摘するこうした「食」と権力との関係を念頭に置いて『流刑地にて』を見直すと、「食っちゃうぞ」という従卒の言葉も、処刑時に受刑者に粥を与えるという士官の説明も、単に滑稽だったりグロテスクだったりするだけではなく、その裏に重要な意味を隠していることが見えてくる。つまり、従卒は単に大尉に反抗したのではない、大尉の持つ権力を奪取しようとしたのである。だとすれば、従卒の犯した罪は叛逆罪ということになるだろうか。彼の身体に刻まれることになっていた文字は「上官を敬え！」(Ehre deinen Vorgesetzten!, S.166)という曖昧なものであった。処刑機械の動きを決定する図面には受刑者に刻まれる文字が装飾文様とともに書かれている。旅行者は士官にそれを見せられるが、まったく解読することができない。その不可解さは処刑される者の罪の不可解さに対応している。従卒に下された死刑判決の本当の理由は表層の滑稽さに隠されて旅行者にも読者にもすぐには見えない。そしてこのこともまた『判決』でゲオルクに下される死刑判決の不可解さに対応している。

上記のように「食」が権力性を象徴していると考えるとき、ゲオルクと父親との権力闘争を描いた『判決』と『流刑地にて』における処刑との関係はいつそう強く結ばれる。『判決』では父親に代わって家庭内の権力を握り結婚によって権力の地盤を強化しようとするゲオルクが死刑判決を受ける。このゲオルクに相当するのが『流刑地にて』で死刑判決を受ける従卒である。従卒は頭の弱い愚かな男として描かれており、ゲオルクと比べると似ても似つかないほどひどく矮小化されている。しかしそれでもなお、権力への志向とそれに対して死刑宣告を受けるという点で両者は同じ構造の中の同じ位置にあると言わざるをえない。『流刑地にて』で描かれる処刑は『判決』の死刑宣告を一目ではそれと分らない衣装を着せてなぞっているのである。

4. 処刑の失敗 — 『判決』からの離脱

カフカは『判決』で主人公を殺すことによって自らを罰した。こうした自己処罰はその後の『変身』や『訴訟』などに引き継がれ、カフカ文学の一特徴となっている。もちろん作者と作品の主人公とは同じではない。同じではないからこそカフカは「書

⁹ 佐々木博康「『変身』— 一生の権力性」(立花健吾/佐々木博康編『カフカ初期作品論集』(同学社)2008年所収) 277頁以下を参照。

くこと」を通じて作られる虚構世界の中で自己を殺し、それによって生きることができたのである。「書くこと」は自己を断罪し、しばしば死に至らしめることであると同時に、逆説的に「生きること」でもあった。カフカが『判決』の執筆で掴んだのは自己を殺す技術であり、それによって自己を生かす技術であった。

しかしながら『流刑地にて』の後半は『判決』と異なる方向に進んでいく。従卒に対して執行されるはずだった処刑は結局実行されないのである。

前司令官の時代から続く裁判・処刑の方法を現在の新司令官は廃止しようとしており、システムは末期を迎えている。士官は学術旅行者に現行システムのすばらしさを訴え、システムの継続に協力してもらおうと試みるが、説得に失敗する。説得をあきらめた士官は受刑者を解放し、あろうことか自分の裸体をベッドに横たえる。刻まれる予定の文字は「正義たれ！」 („Sei gerecht!“ S.188)¹⁰である。ところが古くなってガタの来ている機械は暴走し始め、歯車が製図工から次々と脱落し、馬鋏は文字を書く代わりに、士官の裸体を突き刺す。突き刺さった馬鋏に宙吊りにされたまま息絶えた士官の顔に、約束された浄化も救済(Erlösung)も浮かんではいない。それどころか「生きていた時と同じようだった」(S.193)。ただ士官の額を巨大な鉄針の先端が貫いていた。

これはどういうことだろうか。『流刑地にて』の処刑に『判決』との緊密な結びつきを見る本論の視点から言えば、次のような解釈ができる。『判決』で行った自己の断罪方法は『流刑地にて』において士官が自賛する処刑機械にあたる。裸で処刑台に身を横たえることは、カフカが日記に記した「肉体と魂の完全な開放」に対応している。しかしこの方法はすでに古くなり、崩壊寸前だ。権力奪取を試みた従卒を同じ方法で処刑しようとするが、もはやそれが不可能であることを士官は悟る。この士官とは刑を執行する主体であり、「書くこと」によって自己を断罪するカフカの情熱の化身である。

自己を断罪することは、断罪する側もされる側も自分であるという根本的な不可能性を抱えている。自己を断罪することによって断罪する方の自己が無傷でいられたら、それは自己断罪という言葉の矛盾である。士官が体現する自己断罪の情熱はいずれそれ自体が断罪の対象とならねばならないだろう。こうしてかつての断罪する主体(士官)は断罪される客体に転じ、断罪する側であった自分自身を、「浄化」と「救済」を求めて、処刑機械に委ねる。ところがこの自己断罪というシステム自体がもう

¹⁰ K.ムラデクはこの„Sei gerecht!“ (正義たれ!) に類似音の „Sei gerächt!“ (報いを受けろ!) を重ねて読み込むことができる可能性を示唆している。Vgl. Klaus Mladek, „Ein eigentümlicher Apparat“ -Franz Kafkas „In der Strafkolonie“, In: TEXT+KRITIK, Sonderband(Hrsg. von Heinz Ludwig Arnold) IV/06, München, 2006. S.136f.

機能不全に陥っているのだ。かつて断罪された自己に与えられた「浄化」や「救済」は、もはや自己の裸体を処刑機械に横たえること、言い換えれば「肉と魂の開放」を通じても得ることはできない。

処刑の不成功は『判決』執筆で体得した書き方の挫折である。カフカは初期の未刊作『ある戦いの記録』(*Beschreibung eines Kampfes*, 1907年)の第2部に「生きることが不可能であることの証明」(*Beweis dessen, daß es unmöglich ist zu leben*)¹¹というタイトルを付けたが、死んでなお「生きていた時と同じようだった」士官の顔は、死ぬこともまた不可能になったことを表している。

5. 結語

以上のような読み方からは推論的に言えることを二点記しておこう。

一つは、カフカは『流刑地にて』において『判決』を原基とする過去の自分の書き方を一段高い視点から提示したということである。視点の担い手である学術旅行者は基本的に傍観者であり、士官の問いに答えたり質問したりはするが、流刑地での出来事に積極的に介入することはない。彼は処刑する／されるというダイナミズムの外部に在るいわば思慮深いよそ者である。この旅行者を視点の担い手として設定することによってカフカは自分の「書くこと」について「書く」ことを試みた。

もう一つは、処刑機械の瓦解を描くことによって、カフカは『判決』以降の書き方に訣別とは言わないまでも一定の距離を置こうとしたということである。この距離の置き方は微妙である。というのも、物語の中で処刑機械の無効性をはっきり示しながらも、士官の狂気じみた情熱や残酷な処刑システムが必ずしも否定的には描かれていないからである。当初は処刑機械の残酷さや被告の抗弁も許されない前近代的な裁判方法に批判的な態度を見せた学術旅行者だが、次第に士官の情熱に引き込まれていき、彼の死を見届けてからは流刑地の滅びゆくシステムに共感的ですらあるように感じられる。物語の最後、旅行者は処刑システムを作り上げた前司令官の墓石に刻まれた文言を読む。「予言に曰く、一定の歳月の後、司令官は甦り、当家より、崇敬する者たちを従えて再びこの地に君臨するであろう」(S.195)。この文言は最後に引用されているだけに強い印象を残す。流刑地のシステムに否定的でありながらも否定しきることのできない旅行者の姿は、これまでの「書く」方法が今や自己の救済とはならないことを知りながらも新たな方法を見出せないでいるカフカの姿でもあるだろう。

『流刑地にて』を1914年の秋に書いたカフカは中断していた『訴訟』の執筆を再開するが、およそ三ヵ月後に中止する。以後、1916年暮れに短編集『田舎医者』を構成する一連の短篇を書き始めるまでの2年近くの間、カフカはほとんど作品を残して

¹¹ Franz Kafka, *Beschreibung eines Kampfes und andere Schriften aus dem Nachlaß*, Hrsg. von Malcolm Pasley, Fischer Taschenbuch Verlag, 1994, S.61

いない。
